長谷川慶太郎・日下公人著「緊急出版、東日本大震災、大局を読む！」李白社 2011 年 5 月 22 日刊を読む

核戦争に備える部隊が原発に出動した…長谷川慶太郎

１．今回の震災では福島第一原発の事故があったが、それにも自衛隊はきちんと対応できた。この事故は自衛隊からいわせると核戦争だから出動したのは核戦争の準備のある部隊だった。自衛隊は放射線の防護服を持っているが、今回、福島第一原発での放射能を防ぐという点で一番大きかったのは戦車である。

２．福島第一原発では水素爆発が起きて建屋が飛ばされ、施設にはその残骸が瓦礫となって散乱していた。これは放射線に汚染されており、放水活動や電力復旧活動の障害となっていたため、静岡県御殿場市の陸上自衛隊駒門駐屯地から排土板(ストレートドーザ)を装着した七四式戦車二両が派遣されたのだった。

３．七四式戦車は外部に対して完全に遮断できる戦車である。空気が漏れないようにハッチを完全に遮断できる装置を持っている。だから、核兵器が使われた地域に入っても放射能にやられない。キャタピラも非常にしっかりしていて、被災地に瓦礫の上も平気で乗り越えられる。しかも、瓦礫に乗り上げても、姿勢を補正するので車体が傾かない。だから、実際に現場でも瓦礫を取り除くのに活躍したのだ。

４．陸上自衛隊は核戦争に備えるための装備を持ち、そのための訓練を行っている。まず埼玉県さいたま市の大宮駐屯地にある陸上自衛隊化学学校では、核兵器・生物兵器・化学兵器の防護要員として必要な知識や技能を修得させるための教育訓練を行っている。そして、富士の裾野の演習場の中にある陸上自衛隊富士学校では、普通科連隊を使って核戦争に対応するためにはどうすればいいかを繰り返し訓練している。化学学校で養成された幹部が実際の部隊を運用する訓練を行うのが富士学校なのである。

５．化学学校と富士学校で養成された幹部と実際の部隊がいなければ、今回の福島第一原発の現場作業に自衛隊は参加することができなかったに違いない。また、彼らがいたからこそ事故の処理が可能だった。菅政権にとっては、まさに自衛隊様々なのである。

６．この自衛隊の力はけっして無視してはならない。現実に非常に強力なきわめて有用な能力を持っている。ただし、自衛隊員は非常におとなしい。原発の事故の処理のために派遣された隊員は

誰一人マスコミに登場していない。黙々と与えられた任務を遂行した。これも自衛隊の大きな特徴である。

7．私は三十数年前、自衛隊の最高の幹部教育機関である防衛研究所普通課程で講義した。そのとき、生徒たちに向かって「諸君は生涯縁の下の力持ちを演じなければならない。そういう道を選んだのだと自覚してほしい。諸君はマスコミのフットライトを浴びてはいけないのだ。黙々と命じられた任務を遂行するのが諸君の本務なのであって、それ以外のことを考えてはいけない」という話をしたのだが、この話を聞いていた生徒の一人で後に防衛省幹部になった人物に会ったとき、彼は「あの話にはとても強い印象を受けました」と打ち明けてくれた。

8．いずれにしても、自衛隊がなかったら今度の被災地の救済はとてもできなかった。大きな避難所に自衛隊が入ったら必ず炊事車で温かいご飯を提供する。避難者は自衛隊を拝みたくなるそうで、自衛隊に対する国民の感情も変わっていくだろう。

9．自衛隊が何体の遺体を収容したのかというと、3 月末時点で 1 万 3000 のうち 7000 だった。残りの 5000 が警察、1000 が消防である。遺体は本当に痛んでいる。警察がなかなか手を出せないような遺体でも、それを自衛隊はどんどん収容し、棺に入れて引き渡す。自衛隊は遺体収容しても一体についてお金をいくらもらうということはない。災害出動手当だけだ。警察も消防も同じように遺体収容の手当はでないが、消防や警察では、自衛隊には遺体収容の手当がつくから遺体収容は自衛隊にやらせればいい、自衛隊はお金をもらっているじゃないかと思っているが、それはまったくの誤解である。

10．自衛隊は戦争をできない軍隊である。給料の出し方も戦前の軍隊とは違う。戦前の軍隊だと戦争になれば給料は平時の倍以上になったが、自衛隊は戦争になっても手当がつかない。つくのは災害出動だけだから、自衛隊は災害出動に喜んで行く。ただし災害出動手当が初めて支給されたのは御巣鷹山の墜落事故のときだった。

P87 ～ 91

[コメント]

国家の緊急事態である今回の原発事故は広義の核との戦い、核戦争といえる。日本の自衛隊の核対応部隊の活動を知ることは日本国民の公民としての義務と考える。長谷川慶太郎先生の御報告は有難い。

― 2011 年 5 月 9 日林　明夫記―